メシヤの詩篇

T. アーネスト ウィルソン著

The MESSIANIC PSALMS

T. Ernest Wilson

救い主としての悲しみから、王としての栄光まで
暗やみのどん底から、そびえ立つ高みまで。

メシヤの詩篇

T・アーネスト・ウィルソン著

The MESSIANIC PSALMS

by

T. Ernest Wilson

Publishers

GOSPEL FOLIO PRESS

Grand Rapids MI

JOHN RITCHIE LTD.

Kilmarnock, Scotland

Evangelical Publishers
Tokyo, Japan

救い主としての悲しみから、王としての栄光まで
暗やみのどん底から、そびえ立つ高みまで

目次

序文　12

1　第一一篇　永遠の御子――その職務上の栄光

2　第四〇篇　キリストの受肉　24

3　第九一篇　荒野の試み　41

4　第四一篇　裏切り　57

5　第二二篇　十字架　71

6　第六九篇　罪過のためのいけにえ　87

7　第一六篇　埋葬・復活・昇天　100

8　第六八篇　キリストの昇天　116

9　第四五篇　王なる花婿　128

10　第二四篇　栄光の王　144

11　第二一〇篇　祭司・王・さばき主　156

12　第八篇　最後のアダム　174

13　第七二篇　千年王国――王の統治　188

14　第八九篇　ダビデへの契約　196
15　第一〇二篇　変わることのないお方　203
16　第一一八篇　「ハレル」の結び　212
付録1　修辞的表現法　229
付録2　詩篇の分類　233

この終わりの時代に生きた、勇猛果敢な開拓伝道者たち、および、みことばの教者たちをしのんで。彼らは故郷を離れ、快適な暮らしを捨て、危険をも顧みなかった。世界中の至る所に――この暗やみの世界に――まことの光をもたらすために。キリストの愛に応えるために。本書を謹んで彼らにささげる。

序文

キリストは、復活された日に、エマオへの道でふたりの弟子に会い、「モーセおよびすべての預言者から」ご自分に関する事柄を説き明かされた（ルカ二四・27）。その結果、彼らの心に大きな変化が生じた。彼らは次のように告げたのである。「道々お話しになっている間も、聖書を説明してくださった間も、私たちの心はうちに燃えていたではないか」（同・32）。

主は夕暮れに「二階の広間」に姿を現され、弟子たちに次のように言われた。「わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことばはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした」（同・44）。そして主は、聖書を悟らせるために彼らの心を開かれたのである。

主イエス・キリストご自身とそのみわざについて語っている詩篇はいくつもある。それらが「メシヤの詩篇」と呼ばれるのは、メシヤのことを語っているからである。「どうしてメシヤの詩篇であることが分かるのか」という疑問が生じるかもしれない。その答えは次のようなものだろう。すなわち、ある詩篇の中にメシヤに言及した箇所があり、それが新約聖書の中でキリストに当てはめ

て解釈されている場合である。その詩篇全体がキリストに当てはまる場合がある（たとえば、第二二篇）。ひとまとまりの部分だけの場合もある（たとえば、第四〇篇の六節から一〇節）。何節かだけの場合もある（たとえば、第六九篇の四節、九節、二一節）。たった一節だけの場合もある（たとえば、第四一篇の九節）。

詩篇の中には、主イエスご自身とその御思いだけが記されているものもあるが、作者の経験を記した中に、突然メシヤに言及しているものもある。たとえば、第六九篇がそうである。ダビデは、「神よ。あなたは私の愚かしさをご存じです。私の数々の罪過は、あなたに隠されてはいません」（5節）と叫んでいるが、彼が自分のことを言っているのは明らかである。しかし、「彼らは私の食物の代わりに、苦味を与え、私が渇いたときには酢を飲ませました」（21節）という一文は、明らかにメシヤに関するものである。マタイの福音書の二七章三四節、四八節でキリストに当てはめられているからである。したがって、詩篇の作者が霊的に経験したことと、キリストご自身に関する預言とを注意深く区別しなければならない。

パウロはテモテに次のように勧めている。「あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす（訳注：英語欽定訳は「正しく区分する」）、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい」（IIテモテ二・15）。

ある詩篇のみことばが新約聖書に引用され、それが主イエスに当てはめられていれば、その詩篇

は間違いなくメシヤの詩篇である。しかし、その原則に当てはまらない詩篇が三つある。明らかにメシヤに関するものでありながら、新約聖書に引用されていないのである。すなわち、

第二四篇：栄光の王について語っている。

第七二篇：千年王国におけるキリストの支配について述べている。

第八九篇：ダビデとの契約が彼の大いなる子孫（メシヤ）によって履行されることを説いている。

したがって、これらもメシヤの詩篇に含めることにする。

なお、詩篇の中でメシヤに言及している箇所は、たとえば年代順といったように順序正しく並んでいるわけではない。第二篇は、導入的なものとして、メシヤの職務上の栄光を大まかに預言したものだが、第四〇篇はメシヤの受肉、第二二篇はメシヤの十字架の苦しみ、第一六篇はメシヤの復活といったように、その順序はばらばらである。そこで、本書では、十六あるメシヤの詩篇を、主のご生涯をたどるようなかたちで年代順に取り上げることにする。目次を大いに参考にしていただきたい。

どうか、私たちの理解が深まり、これらすばらしい詩篇の中の主に関する事柄を知ることができるように。また、聖霊の助けによって、それらを解釈することができ、それぞれの詩篇が私たちの心に力強く語りかけるように。